

第四百八回 青葉会

令和二年四月二十三日(木)

ウェブ句会

〈選者〉

◎ 川口孤舟

〈投句・選句〉

伊賀山そらお 今井紀久男 柿崎忠彦 川口孤舟 久米五郎太 小西弘子  
小早健介 在間千恵 佐藤ただしげ 朱牟田恵洲 土谷堂哉 豊田ゆたか  
中川雅夫(新人) 福島正明 古田昇 星田啓子 宮内規雄 山崎亜也  
山田けい子 山内天牛 渡邊盛雄  
赤田堅 安部眞希子 市橋伸彦(飛び入り) 重枝孝岳 庄司龍平 高橋敏郎  
早川充章 松崎浩 村田くに子 山本三恵

〈選句のみ〉

《互選句》

十二点

◎ 振れば鳴るドロツプの缶春うらら

正明

(眞・伸・忠・孤・〇恵・昇・充  
〇啓・く・亜・け・天)

十点

友見舞ふ話とぎれて桜餅

けい子

(そ・伸・紀・五・健・千・た  
堂・啓・浩)

八点

野草茹で摘まむ箸先春立てり

啓子

(堅・紀・忠・孝・堂・雅・昇  
〇浩)

七点

乗り移る小舟の揺れや蘆の角

全

(五・〇健・〇孝・恵・龍・堂  
規・〇く)

六点

我が余生不要不急の臃かな

忠彦

(紀・千・孝・ゆ・雅・規  
ただしげ)

◎ 煌々と弥生の空にスーパームーン  
草餅や煙管の似合ふ縁の叔父

ただしげ

(孤・五・ゆ・〇充・け・盛)  
堂哉

五点

花も散り日々自粛して老いゆくか  
駅前のカフェーも閉まり初燕

そらお

(紀・〇忠・た・敏・浩)  
五郎太

◎ あたたかや気紛れに買ふ串団子  
空つぼな時は紡げず春暮るる

千恵

(〇そ・伸・忠・正・天)  
恵洲

ちちと鳴き嬉々と聞こゆる鳥の恋

啓子

(紀・忠・健・〇千・〇龍)  
盛雄

四点

籠る日々目刺で晩酌癖になり  
花は葉にパーマ帰りの妻いとし

そらお

(〇伸・紀・堂・浩)  
紀久男

◎ 図書館は休館といふ花の冷え  
満開の桜待たずに母逝きぬ (百二歳)

恵洲

(孤・弘・正・昇)  
堂哉

花咲ける枝煮て春を汲み上ぐる  
(布を桜色に染めるには花が咲こうとしている枝でなければ桜色は出ないらしい)

啓子

(紀・た・〇堂・三)  
亜也

籠居の窓を掠める春の鳥  
千体の地藏見守る山桜

けい子

(五・千・ゆ・〇雅)  
盛雄

◎ 千鳥ヶ淵静けさもどり花筏

盛雄

(そ・紀・孤・け)

三点

起き抜けに初音を聞きて窓に寄り  
花咲けど心虚ろなコロナの乱

そらお

(伸・紀・千)  
忠彦

校門の残花虚しきパンデミック  
「初出」と未知の言葉を知る四月

五郎太

(そ・紀・亜)  
千恵

知らぬ間に葉桜となり風抜ける  
雨上がり桜並木は花筵

全

(堅・〇た・恵)  
ただしげ

◎ 口笛は母校校歌や春の風

恵洲

(孤・健・天)

(◎中七→「母校の校歌」)

二点

うららかや車座をなすべピーカー  
◎ 憂さ去れと桜堤に高唱す  
◎ しばらくは枝垂桜の中にをり  
外出を控えし春日抹茶碗  
◎ 麗かやビロードのごと瀬戸の海  
折返すスイツチバツク春うらら

◎ 春風や上方落語の浮かれやう  
老いどちのゴルファー和む初音かな

自肅なぞどこ吹く風の八重桜  
しやぼん玉なべて女の口軽し  
籠り居の長き昼の間花終わる  
鶯や本括らるる集積所

ひとまづの小鉢ばい貝姫栄螺  
◎ 黄金週間見つめる空の予定表

春めくや満点星躑躅の白い花  
葉牛蒡の煮物うれしい讃岐路や  
コロナにもめげず鶯ホーホケキヨ  
コロナ風列島吹き荒れ春行きぬ  
道の辺の草にも命春の空

春寒むに寒き世嘆き年重ね(二月生まれ)  
老いし春菌賑いに生思ふ

コロナ禍や庭を明るく花水木  
病む国に福音のごと囀れり  
サクランボ亡き妻恋し山恋し  
問診に電話で応答四月かな  
観客のなき大レース花は葉に(皐月賞)

一点

春疫病祓ひ清めよ諏訪大社

春法事一本つけてお赤飯  
孫躍る野山を越えて雪の果て

自肅時に盃想ふ花水木  
大粒の泪湛へて君影草

聖週間人との距離を少しとり  
春夕焼け遠くに薄き不二の峰

紅白の椿日中友好館  
巢籠もりて晴詭雨詭残る花  
から傘をさして牡丹花開く  
平安を思えと馬酔木盛んなり  
病床の妻サクランボ見て笑えりき  
看々(みすみす)今春また過ぐ非情にも

コロナ禍で犬の春の毛伸び放だい  
早々と虻を捕つたと孫眞顔  
コロナ禍に桜見る気も失せにけり  
春愁や宇宙から来し電子雲

堂哉 (○眞・そ・健)  
全 (堅・孤・雅)  
全 (孤・啓・規)  
ゆたか (紀・正・盛)  
昇 (孤・○ゆ・正)  
孤舟 (正・く・垂)

紀久男 (孤・○け)  
全 (盛・く)

忠彦 (紀・正)  
孤舟 (弘・○垂)

五郎太 (眞・そ)  
弘子 (恵・啓)

全 (紀・龍)  
健介 (紀・孤)

ただしげ (孝・龍)  
全 (紀・雅)

ゆたか (敏・○昇)  
全 (た・敏)

全 (孝・○規)  
雅夫 (紀・堂)

全 (堅・紀)  
正明 (紀・充)

昇 (○紀・○盛)  
規雄 (敏・昇)

天牛 (紀・弘)  
盛雄 (紀・く)

紀久男 (天)

全 (忠)

忠彦 (紀)

全 (紀)

五郎太 (ゆ)

孤舟 (三)

全 (た)

弘子 (○正)

健介 (充)  
ゆたか (孝)  
雅夫 (○三)  
規雄 (紀)  
垂也 (紀)  
天牛 (眞)  
全 (紀)  
全 (紀)  
盛雄 (龍)

《句評》

僭越ですが部分的に省略したり言葉を換えたりしておりますがご容赦願います（紀）

十二点句「振れば鳴るドロップの缶春うらら」

① 恵洲さん・ドロップのあの缶、懐かしく郷愁を覚えます。好みの色が出るまで振ったのです。春うららの季語にも適っております。

② 啓子さん・じじばばとお孫さん、カラカラという音と春の陽射しの三者が響き合って穏やかな光景が目には浮かびます。

七点句「乗り移る小舟の揺れや蘆の角」

① 五郎太さん・水が眩しくなつた春の川辺（水郷のような所）の蘆に若芽（つの）が出ています。小舟に乘ろうとすると少し揺れ川面が光る。それも一寸嬉しい。

「どの子にも風の空あり未来あり」

① 健介さん・まさに同感ですが今は風あげの光景はあまり見られません。場所もないんでしようが、何よりスマホと塾通いで子供の世界が変わって仕舞いましたね。もつと風を揚げて欲しいものです。

六点句「草餅や煙管の似合ふ縁の叔父」

① 弘子さん・懐かしい情緒がいつぱいでこの世情の中にほっとするような句でした。

五点句「花も散り日々自粛して老いゆくか」

① 忠彦さん・今の自分の心境にぴったしの句です。

「空つばな時は紡げず春暮るる」

① 千恵さん・これから先の多くの人の人生できつとこの2020年の春が辛くて我慢の日々であつたと記憶されるだろうし現在もひたすら身を低くしてこの疫病が通り過ぎるのを待つ日々であることを憂いている気持ちも伝わってきて共感しました。

四点句「籠る日々目刺で晩酌癖になり」

① 伸彦さん・「目刺」がいいですね！当節は家で独り酒あるいは奥様とさしつさされつの方々が増えたことでしょう。片や飲み屋の大將達はさっぱりお手上げ状態。「お金はおあし」廻つてくれなければいけません。嫌なコロナ禍から一刻も早く解放されることを願っています。コロナ関連の句が多かつた中で、この句がすとんと腑に落ちました。

「花は葉にパーマ帰りの妻いとし」

① 五郎太さん・今時パーマという言葉は古い気がするが髪を綺麗にして奥さんが帰ってくる。いつも顔を合わせ、特に外出自粛で一緒にすることで奥さんがなんだか綺麗に見える。季節も葉桜になり、あたりの空気も爽やかになってきた。「花は葉に」の季語が効いている。

「花咲ける枝煮て春を汲み上ぐる」

① 堂哉さん・とても美しい。ピンク色に染めあがってくる糸の束が臉に浮かびます。

「春を汲み上ぐる」に打たれました。

三点句「折り返すスイッチバック春うらら」

① 亜也さん・スイッチバックののんびりした感じが季語とよく馴染んでいる。

但し、考えてみるとスイッチバックを訳せば「折り返し」で、一寸変。

「うららかや車座をなすべカー」

① 眞希子さん・平和と将来への希望が約束されたような光景！公園を横切る毎に見慣れたものの貴重さを再確認し、一刻も早いコロナ禍の終息を願うばかりです。

「知らぬ間に葉桜となり風抜ける」

① ただしげさん・今年は新型コロナの流行でゆつくり桜を見ることなく過ぎたことを寂しく思っている様子が表れている。

「麗らかやビロードのごと瀬戸の海」

① ゆたかさん・瀬戸内海の島に生まれ育つた私は「ビロードのごと」という斬新な表現に感動しました。

二点句「外出を控えし春日抹茶碗」

① 正明さん・・ 外出自粛の折、徒然にお茶を点てる気持ち解ります。

「コロナにもめげず鶯ホーホケキョ」

① 昇さん・・ 新型コロナの自宅籠城下、鶯の清らかな声はせめてもの救いである。

「病む国に福音のごと囀れり」

① 紀久男・・ 新型疫病が蔓延つて世界中に拡散してまだ収まりが見えぬ状況下、特効薬の市販認可と自粛要請の解除も近いと明るい喜ばしいニュースも今暫くの辛抱だと鶯や雲雀が告げている見事な句と思えます。

\* \* \* \* \*

●次回青葉会

五月二十八日(木) ウェブ句会

井の頭公園吟行の予定でしたが、自粛要請が五月末まで延期になりました為中止。今秋に延期するか検討中です。

▲投句二句以上五句まで

五月二十三日までに このメール(今ご覧のメルアド)・FAX・郵送でお願いします。

令和二年 五月七日

文責 紀久男



令和二年四月 青葉会報

一、 四百回記念句集送呈先よりお祝いの品が届いております。

① 名古屋の社友、秋元宏さんより み乃亀の「ゑびす焼」(海老煎餅)

② 広島の社友、田部修司さんより 大吟醸「同期の桜」と原酒「江田島」

二、 新潟の俳人、熊谷國男さん(NK↓アヴァンテイスタツフ)(俳人協会役員)より

記念句集の評と新潟日報4月7日(火)掲載の孤舟選者の写真入り紹介記事等、希望者にコピー進呈します。

三、 記念句集にミスプリント

恵洲さんの作品「浮浪児」を小生の校正漏れで「浮浪者」としました。訂正してお詫び申し上げます。

四、 関係者近詠

賜りし琵琶湖の小鮎灘の酒

充章

卯の花の自粛の庭を明かるうす

全

灯台の淡き瞬き霜のこゑ

孤舟

自画像は死ぬまで未完寒オリオン

全

靴音の追ひかけてくる冬の月

全

この星に生くるひとりや冬銀河

全

雪吊の縄引き絞る真澄空

全

――「爽樹」 5月号

春眠の覚めて眩しき光かな

規雄

――「NHK俳句」5月号 宇多喜代子選

花冷えに出会ふ一日や鳩の湖(うみ)

盛雄

余生とて心は同じ葱坊主

全

残る花地球の狭さ学びけり

健介

春惜しむ余部鉄橋見納めに

紀久男

――きさらぎ句会 4月

五、 孤舟選者の一句が角川の「合本俳句歳時記」第5版に掲載されました。

「なまはげの吠え星空を沸き立たす」・・・P.995「なまはげ」

――選者の第4句集「星空」の題名にされておられます。

六、 小生のひどい悪筆を今迄忠彦さんが読解のご苦労されてワープロしてくださって居りましたが、今回から啓子さんに引受けて貰っております。

令和二年五月七日

紀久男 記